子供のころの思い出

寺　川　庄　蔵
（志賀町在住，比良の自然を守る連絡会議代表）

私は，比良山麓に生れ育って44年になります。

子供のころ近所の友達とよく田んぼや山を飛びまわって遊びました。昭和30年前後のことです。その時代は，まだ開発らしいものはほとんどなく，交通手段も江若鉄道が唯一のものでした。国道161号線は通っていましたが，舗装はもちろんされておらず，通る車も数える程でした。学校の帰りに木戸川の坂を登れずに困っている車を何回か押してやったこともありました。

小学生のころの楽しかった思い出といえば，なんといっても水泳です。夏休みになると毎日毎日，琵琶湖に泳ぎに行きました。シジミや貝は足を使っていくらでも堀り出せました。えびや魚を漁るのもとても楽しくて，大人になって夏休みがなくなったらどうしようと，真険に悩んでいた時もありました。その頃の琵琶湖の水は澄んでいて，すき透るように美しかったことを覚えています。

山の思い出といえば，遊びよりも山仕事が印象に残っています。比良山系には国有林がほとんどなく，だいたい山頂部は地区の共有林が多く，山麓部が私有林になっています。私の家も，その山麓部に少し私有林があって祖父につれられて杉や桧の植林によく行きました。母は主に下刈りといって，いわゆる柴刈りをしていました。

父とは，割木（マキのこと）にする木を切りにかなり高い所まで行きました。急俊な谷に木を集めて道まで落す作業は，危険でしたがおもしろくて強く印象に残っています。その木を木の車（輪まで木で作ってあった）に乗せて，バチ（木のブレーキ）をかませてスピードが出ないようにして運び降していました。また，ロープには藤のつるを使っていました。何もかも山にあるもので自作していたのがわかります。

農閑期になると，父は砂防工事に行っていましたが，時々「セメンあげ」といって，上流の砂防工事の現場までセメントをあげる仕事をしていました。私も，休みの時など車の後を押したりして手伝わされましたが，大した役には立っていなかったようです。このセメンあげに欠かせぬ力は牛でした。農繁期を終えたあと暇になった牛は，このセメントを積んだ車を引っぱってがんばっていたのです。

その時通っていた道は，コンピラ道とも呼ばれて登山道でもありました。狭くて舗装などもちろんされていませんでしたが，よく整備されていました。それは，私の在所の総仕事として，村人が総出で山の道造りをしていました。これは今も続いていて年に３回行われています。また，「山もどり」という日が年に１回設けられていて，この日は山に入ってはならない日とされています。

この昔の道で印象深いのは，谷側の道端に植えられた並木の大木です。昔の人は，山に道をつくる時，道が崩壊しないように植えたのだと思います。それに比べて現代の砂防道や林道は，ひどいものです。土砂の崩壊は毎年のように続いており，まともに車が通れるのもしばらくの間というありさまです。まして歩いて通ることなど大変危険な状態です。

こうした砂防道や林道が，比良山系では何ケ所かつけられていますが，いずれも共通して崩壊が激しく危険な状況になっています。そのためにまたいくつもの堰堤を作る結果となって，比良の美観を損うことにもなっています。

昔，といってもまだ僅か30年前まで，比良の自然は本当にすばらしいものでした。山麓に住む私たちにとっても，生活と切り離すことはできず，山も川も田んぼも琵琶湖も，住しと一体のものとして大切にしてきたものが，経済優先の社会変化の中で，急速に失われてきました。

比良の自然を守るということは，地元にとっても，新しい良き時代をとり戻すことでもあると考えています。